

エチオピアの職人文化から、 現代日本における新しい生き方を探る



人間・環境学研究科修士1年
水上 優
エチオピア
2016年8月5日～
2016年9月22日

渡航概要と内容

私は上記の期間、エチオピアに滞在し、エチオピアの鍛冶職人について調査しました。ビザ申請や調査許可証の取得のため、到着から一週間ほど首都アディスアベバに滞在したのち、南部諸民族州に位置するジンカ市に移動しました。当地ではアルバミンチ大学付属博物館館長に挨拶したのち、ホームステイ先を探すため、アルキシャ村、メツァ村、ドルドラ村を訪問し、一番雰囲気の良いアルキシャ村の鍛冶職人の方の家にホームステイすることとしました。アルキシャ村では3週間滞在し、鍛冶仕事の基本から日常生活までを観察、体験しました。具体的にはナイフ作りを体験したり、日々の生活の糧であるトウモロコシを市場に買いに行ったりしました。また、親族の家に訪問したり、近隣の住民宅へ夕食を食べに行ったりなど、在地の人々とできるだけ同じような生活に努めました。フィールドノートにメモを行う観察の他に、写真や動画の撮影、鍛冶職人の使う炉の温度の測定、インタビューなど複合的な人類学的な調査を行いました。ホームステイ先のご家族には次回来訪時また滞在することに関して承諾を得ました。

その後、アディスアベバに戻り、ビザ受け取りのため一週間滞在しました。アディスアベバでは大学図書館及び書店での文献調査や、ドイツや日本の他大学から訪れるエチオピア研究者の方々を紹介していただき、見聞を広げました。

渡航を通じて感じたこと

私が当初見ようとしていた、職人がいかにして生き残っていくか、どうやって技術を伝承するかといったことは実質3週間といった短い期間では観察できないほど複合的で難しいテーマであることを実感しました。どのように技術を伝承するかに関しては、世代間の変化を観察しなければならず、その場合子供が幼少の時から成人してしばらく観察しな

れば、学術的にもっともらしいことは言えないことを感じました。また、職人がどのようにして生活の糧を得ているかについては、職人仕事だけでなく、土地の地代収入、農地からの収穫など現金だけでなく、様々な手段や方法によって生活を成り立たせていました。また、3週間ホームステイしたぐらいではお金の問題（家計）については質問しづらく、どこまで図々しく質問し良いものなのかも大変悩みました。

日本との働きかたについては、エチオピアの人々の月給を過信しない姿勢に驚きました。私の出会った人々は毎月月給をもらう公務員であっても、少しまとまったお金ができると土地を購入し、自ら耕します。耕す土地、耕すために必要な牛をとくに重要視しており、食べ物を作ることができることに大きな価値を置いているように感じました。その一方でお金になることならなんでもする、なんでもできる時間的余裕があることも目にしました。滞在先のお宅では、観光客の受け入れや観光客向けの鍬の制作なども副業として行っていますが、それは本業である鍛冶仕事が月給をもらうような仕事に比べ時間の融通が利きやすいためやっていることであると感じました。

また、最近飛行機代もやすくなり、友人も世界各地にいるので世界が狭くなったと感じていましたが、エチオピアでの生活は私の全く知らない生活で、まだまだ世界は広いと感じました。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

まず、修士論文に関わる研究活動に生かしていきたいと考えています。今回の渡航によって、長期間滞在できるホームステイ先が見つかり、修士論文に関する調査の道筋ができました。また今回の調査によってエチオピアの鍛冶職人の全体図や概況をすることができたため、今後研究課題を先鋭化させ、明確なリサーチクエスチョンを立てたいと考えています。

今回の渡航から、エチオピアの人が「自由」で「柔軟」に見ていた自分がいかに自分勝手に彼らをまなざしていたのかを思い知りました。私は日本社会を窮屈に感じることによって彼らを無理やり理想の姿だと思い込んでいたのです。他者をまなざす者として、今回の経験で得た気づきを忘れずに真理を追究したいと思います。

主な奨学金の使途

*渡航費

*予防接種・海外旅行保険

*滞在費 など

